

大学生活の過ごし方のタイプとその 心理的特徴についての検討 (2)

都 筑 学 早 川 宏 子
村 井 剛 早 川 みどり
金 子 泰 之

Investigation about Types of College Life Perspective and Their Psychological Characteristics (2)

Abstract

This study aimed to examine types of college life perspective, and time use distribution for college different activities which was affected by the degree of time use satisfaction in daily life, goal in college life, and part time job experience. The participants were 1,112 undergraduate students in Chuo University. They were asked to complete a sheet of questionnaire which consisted of the following items ; college life perspective (Mizokami, 2009), the degree of time use satisfaction in daily life, goals in college life and its realization, Scale Measuring a Sense of Generalized Self Efficacy (Miyoshi, 2003), goal consciousness scale (Tsuzuki, 1999), and part time job activity. Using cluster analysis with scores of 17 college life activities, six different types of college life perspective were extracted ; activity stagnation group, independent out-of-class study group, in-class study group, personal relation group, study avoidance group, and virtual activity group. The students of these six groups spent quite different activities in college life and also had unique goals trying attainment them. Students who felt high degree of time use satisfaction reported they executed their goals in college life with more positive time perspective. Students who had clear future career choice had higher level of hope for the future. Finally, students who did part time job had higher level of time use satisfaction, and experience of part time job might be positive effect to promote career development. Based on these findings, meaning of college life perspective and role of goal, career choice and experience of part time job for undergraduate student were discussed.

1. 問題と目的

一日24時間という制約の中で、どのような活動を重視し、一日の生活時間をどのように配分していくかは、私たちが生きていく上で極めて重要な意味を持っている。大学生にとっての主要な活動は、授業や授業外の学習、サークル活動、友人との交際、アルバイトなどである。学生たちは、そうした活動の中から、自らが大切だと考えるものを選択して優先的に時間を割り当てていく。都筑・早川・村井・早川・岡田(2010)²¹⁾によれば、大学生が重視する重要度の高い活動は、「友人との交際」「授業」「アルバイト」「サークル」「趣味の活動」「資格のための勉強」であった。

大前(2004)¹³⁾が3つの異なる大学における学生のライフスタイルに差異を見出したように、大学ごとに少しずつ異なる学生気質のようなものが存在していると考えられる。そうした個別の大学の特色を背景にしながら、同時に、同一の大学内においても、いくつかの異なる生き方を追求する学生がいると考えられる。さらに、現代の学生が共通に持っていると思われるような時代的な特質も大きな背景要因として考慮すべきであろう。

大学生の生活実態の一般的な特徴や個別の大学における特徴をしっかりと押さえた上で、そこに存在するさまざまな下位タイプの心理的特徴を把握していくことは、青年心理学にとって重要な研究課題であるといえる。本研究では、生活時間の過ごし方に着目し、異なるタイプの学生生活を送っている学生の心理的特徴について検討していくことを目的とする。

最初に、最近の大学生の特質について見てみよう。東京大学大学経営・政策研究センター(2008)¹⁹⁾の全国大学生調査(全国127大学の48,233人)において、授業への出席では、「興味がない授業でもきちんと出席する」に対して、79.8%の学生が肯定的な回答だった。また、出席の割合は、「7～9割」と「10割」という回答を合わせると、90%を超えていた。西垣(2008)¹²⁾の調査(10大学の1年生2,239人)では、自習の時間が週5時間以内である学生が半数を超えていた。

東京大学大学経営・政策研究センター(2008)の調査によれば、マンガを除いて1ヶ月の間に何冊の本を読むか尋ねた質問では、29.5%の学生が「読まない」と回答していた。明治安田生活福祉研究所(2010)⁸⁾の大学生に関する意識調査(大学1～4年生4,120人)においても、4人に1人が1ヶ月の間に授業以外の書籍を全く読まないという結果だった。

これらの調査結果から明らかなように、最近の大学生は、授業には真面目に出席するが、授業以外に自ら進んで勉強したり本を読んだりはしないという傾向が見られる。

それでは、大学生は、どのようなことに興味を持ち、どのような目標を持って大学生生活を送っているのだろうか。

全国私立大学連盟学生委員会 (2011)²⁵⁾の第13回学生生活実態調査 (全国122大学の7,117人)によれば、大学生活の中で興味・関心のあること (2つまで選択可)は、「大学の勉強」(22.9%)、「クラブ・サークル活動」(21.9%)、「資格の取得」(20.4%)、「就職活動」(15.8%)、「友人との交際」(13.7%)、「アルバイト」(11.2%)であった。

東京大学大学経営・政策研究センター (2007)の全国大学生調査によれば、大学生が在学中の目標として重要であると考えているのは、「将来の仕事に活かせる能力を身につける」(82.7%)、「自分の将来の方向を見つける」(79.3%)、「専門分野の知識・理解を深める」(76.3%)、「広い教養、ものの見方を身につける」(75.4%)、「有意義な人間関係を築く」(75.1%)、「社会人になるまでの時間をエンジョイする」(58.0%)、「資格試験・公務員試験などに合格する」(51.0%)であった (5件法による回答のうち、「最も重要」と「重要」を合計した割合)。

國眼・松下・苗田 (2005)⁷⁾は、大学生活において最も大切にしていること (2つまで選択可)を検討し、「豊かな人間関係を築くこと」(34.8%)、「将来へ向け知識や技術を身につけること」(28.7%)、「勉強も楽しみもほどほどに経験する」(17.4%)、「教養を高める」(13.9%)という結果を得ている。

朴澤 (2008)⁴⁾は、東京大学大学経営・政策研究センターの全国大学生調査のデータを再分析し、大学教育との関わり方として、「卒業後の目的の明確さ」と「大学教育との親近さ」の2軸をもとに4つの類型を抽出し、「高同調」型、「独立」型、「受容」型および「疎外」型と名付けている。その中で、「卒業後の目的が明確で、大学の授業はその目的と関係が深いと考えられている『高同調』型には、正課・課外の両方とも積極的に取り組む学生が多いことを明らかにした。

渡辺 (2006)²³⁾は、大学生のライフスタイルを学業型、部活動型、アルバイト型、中庸型、消極型の5つに類型している。長谷川 (2011)³⁾は、大学生活に対する志向性の尺度を作成し、遊び志向とスキル獲得志向の2つの下位尺度を見出している。

明治安田生活福祉研究所 (2010)の調査によれば、大学生活に満足している人は、友人との時間、部・サークル・同好会の活動、恋人との時間に楽しみを多く感じ、満足していない人は、インターネットによる情報収集、一人の時間、テレビ・DVD鑑賞、ゲームに楽しみを多く感じていた。また、大学で得たものは、友人、専門知識・技術、教養や広い視野が上位を占めていた。

西垣 (2008) の調査によれば、「専門で研究するための基礎的な学力と技術」「将来の職業に専門的知識を生かす応用力」「専門外にわたる幅広い教養」「分析を通じての批判的思考力」の獲得は、授業を通じての獲得が授業以外の活動を通じての獲得を上回っていた。1週間あたりの「勉強や宿題をする」時間を、一日あたりにして1時間未満である「週5時間以内」と、「6～15時間」と「16時間以上」の3群に分けて群間の差異を検討したところ、すべての項目について自習時間による有意な主効果が見られ、自習時間が週5時間以内の群が他の2群よりも有意に評定値が低いことが明らかになった。また授業外では、5項目すべてにおいてクラブ活動・サークル活動を通じて獲得したという回答が多かった。

これらの調査結果は、学生たちが大学の授業を通して知識や技術、教養、将来役立つような能力を習得していると同時に、学生たちが授業外のサークル活動や友人との交際を通して多面的な知識・技術、能力を身につけていくことを示している。

その一方で、大学生にとって、授業外の活動の中で、サークルと並んでアルバイトが占める割合が大きくなっている。東京大学大学経営・政策研究センター (2007)¹⁸⁾の調査によれば、1ヶ月の生活費（授業料を除く）の3分の1（4万1,700円）をアルバイトで賄っているという。

伊熊 (2011)⁹⁾によれば、アルバイトをしている者は「忙しい」と感じる者が多く、アルバイトをしていない者は「忙しくない」と感じる者が多かった。並河 (2002)¹¹⁾は、平日及び休日のアルバイトの時間数と教養・娯楽の時間数との間に有意な負の相関を見出し、アルバイトが多いと教養・娯楽に当てる時間が少なくなることを明らかにした。吉岡・風間 (1996)²³⁾によれば、アルバイト時間が長いほど、睡眠時間が少なかった。加来・八尋 (2003)⁶⁾は、アルバイトの意義として、① 収入を得る、② 社会勉強が特に多いことを明らかにした。

杉山 (2007, 2009)¹⁵⁾¹⁶⁾は、アルバイト経験とキャリア意識との関連を検討し、アルバイトの位置づけに関する尺度を作成し、アルバイトへの積極的関与とアルバイトの道具的認知の2つの下位尺度を見出した。さらに、キャリア意識の形成に対して、アルバイトの活動自体ではなく、その位置づけが重要な意味を持つことを明らかにした。

明治安田生活福祉研究所 (2010) によれば、アルバイトを全くしない学生と比較して、週5日アルバイトをしている学生は、就職活動をするにあたって、「特に不安を感じない」の割合が高く、「就職試験に合格する自信がない」「自分がどんな職業に向いているかわからない」「仕事をする能力に自信がない」の割合が低かった。

関口 (2010)¹⁴⁾は、アルバイト経験とキャリア形成との関連を検討し、週あたりのアルバイト時間が12時間から18時間の間にかけて主体的キャリア行動などが最大となることを示した。

アルバイトはある程度の時間まではキャリア形成への効果を増大させるが、それ以降はキャリア形成への効果が逡減し、キャリア形成にとって最適なアルバイト時間が存在することが示唆された。

田村・木村・三井・松瀬 (2011)¹⁷⁾によれば、アルバイト活動におけるさまざまな望ましい経験は、心理的 well-being の次元にポジティブな影響を及ぼしていた。

これらのことからわかるように、アルバイトの経験は個人のキャリア形成に効果をもたらすが、その内容や位置づけ、適切な時間数が重要な役割を果たしているといえる。

本研究においては、都筑・早川・村井・早川・金子 (2011)²²⁾に引き続き、溝上 (2009)¹⁰⁾における大学生生活の過ごし方尺度を用いて、大学生のタイプを抽出する。この尺度は、授業、授業外の学習、自主的学習、読書、マンガ・雑誌や新聞を読む、クラブ・サークル活動、アルバイト、同性や異性の友人との付き合い、テレビ、ゲーム、通学時間という17の項目について、1週間に費やす時間数を指標として検討するものである。これらの活動は、大学生の主要な活動を網羅しており、それぞれの活動時間数の多少によって、次に述べるようないくつかのタイプが存在することが明らかになっている。

溝上 (2009) は、「授業外学習・読書」「インターネット・ゲーム・マンガ」「友人・クラブ・サークル」の3因子を抽出し、クラスタ分析にもとづいて4つの異なるタイプを見出した。タイプ1は、「インターネット・ゲーム・マンガ」の得点だけが平均より高く、他の2つの下位尺度得点が平均を下回る学生である。タイプ2は、3つの下位尺度の得点が平均以下の学生である。タイプ3は、3つの下位尺度の得点が平均以上の学生である。タイプ4は、「友人・クラブ・サークル」の得点だけが平均よりも高く、他の2つの下位尺度得点が平均を下回る学生である。タイプ3は知識・技能の獲得、将来設計、充実感、学習動機などの得点が高い傾向を示し、日々が充実しており、かつ大学生生活を通じて自分が成長していると実感している学生タイプであると考えられている。

都筑・早川・村井・早川・金子 (2011) は、「授業外の自主的勉強」「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」の3因子を抽出し、クラスタ分析によって、限定的対人活動群、発展的対人活動群、ヴァーチャル活動群、自主的勉強群、消極的活動群、全般的活動群という6つの異なるタイプの学生がいることを明らかにした。限定的対人活動群と発展的対人活動群は、友人・クラブ・サークルなどの対人交際を中心に大学生生活を過ごしている点が共通していたが、発展的対人活動群の方が限定的対人活動群よりも、対人交際を含む全体的な活動範囲が広い点が異なっていた。ヴァーチャル活動群は、直接的な人間関係よりもインターネット・マンガ・ゲームなどのメディアとの親和性が強い点が特徴的だった。自主的勉強群は、他者との

活動をおこなうよりも、自分の目標を目指して一人でコツコツと勉強する方を好むようなタイプであった。消極的活動群と全般的活動群は、大学生活においてバランスを取って過ごしている学生である点で共通していたが、全般的活動群の方が消極的活動群よりも、積極的に活動をおこなっている点が異なっていた。さらに、これらの6つのタイプの学生は、対人関係意識や時間的展望などの指標に関しても、それぞれのタイプに固有な特徴的な傾向を示していた。

本研究では、次の4点を明らかにすることを目的とする。第1に、大学生活の過ごし方の学生タイプを検討し、都筑・早川・村井・早川・金子（2011）で得られた6つのタイプと比較する。あわせて、大学生活の過ごし方のタイプによって、大学生活の目標の重要度や実行度に差があるかどうかを検討する。第2に、日頃の時間の使い方の満足度によって大学生活の活動時間数に差があるかどうかを検討する。あわせて、大学生活における目標の重要度や実行度、自己効力感、時間的展望に差があるかどうかを検討する。第3に、進路希望の持ち方や進路希望の内容によって、大学生活の活動時間数に差があるかどうかを検討する。あわせて、自己効力感や時間的展望に差があるかどうかを検討する。第4に、アルバイトの経験によって、大学生活の活動時間数に差があるかどうかを検討する。

[都筑 学]

2. 方 法

2.1 調査対象

調査対象者は、中央大学の多摩キャンパスに在籍する学生1,112名（平均年齢19歳9ヶ月、標準偏差1歳6ヶ月）である。

対象者の性別は、男671名、女438名、不明3名であった。男女比は約1：0.65であった。全学（理工学部を含む）の男女比は2：1であり、その数値と比べてみると女子の割合がやや高かった。

学年の内訳は、1年694名、2年258名、3年69名、4年86名、不明5名であり、1年生が約6割を占めていた。都筑ら（2011）の調査と比較してみると、上級学年の学生の割合がやや多かった。

学部の内訳は、法235名、経済242名、商348名、文277名、総合政策7名、不明3名であり、総合政策を除けば各学部の割合は約20～30%であり、学部間の偏りは比較的少なかった。

住まいの内訳は、自宅616名、自宅外491名、不明5名であり、自宅と自宅外の比率は約1：0.8であり、現状をおおよそ反映した結果になっていた。

表2-1 学年ごとの男女の人数

	男	女	合計
1年	397 (57.2%)	297 (42.8%)	694
2年	162 (62.8%)	96 (37.2%)	258
3年	42 (60.9%)	27 (39.1%)	69
4年	69 (80.2%)	17 (19.8%)	86
合計	670	437	1107

表2-2 学部ごとの男女の人数

	男	女	合計
法	137 (58.3%)	98 (41.7%)	235
経済	174 (71.9%)	68 (28.1%)	242
商	234 (67.2%)	114 (32.8%)	348
文	120 (43.3%)	157 (56.7%)	277
総政	6 (85.7%)	1 (14.3%)	7
合計	671	438	1109

表2-1に示したのは、学年ごとの男女の人数である。1～3年生においては、およそ2：1の男女比になっていたが、4年生のみにおいて、男女比が4：1と男性の割合が多かった。

表2-2に示したのは、学部ごとの男女の人数である。この結果は、新入生の95% (5,716人)を対象に実施した2011年度中央大学学生アンケート (中央大学大学評価委員会, 2011)²⁾における学部別に見た男女比とほぼ同じであった。

以上のことから明らかなように、本研究の調査対象者は本学における学生構成を反映しているといえる。

2.2 調査内容

質問紙の構成は、以下の通りである。

① フェースシート

性別、学年、年齢、学部、住まいを尋ねる5項目。

② 大学生生活の過ごし方

溝上 (2009) が用いた大学生生活の過ごし方の尺度17項目。授業、授業外の学習、自主的学習、読書、マンガ・雑誌や新聞を読む、クラブ・サークル活動、アルバイト、同性や異性の友人との付き合い、テレビ、ゲーム、通学時間などについて、1週間に費やす時間数を (1) 全然ない、(2) 1時間未満、(3) 1～2時間、(4) 3～5時間、(5) 6～10時間、(6) 11～15時間、(7) 16～20時間、(8) 21時間以上の8段階評定で回答を求めた。

③ 時間の使い方の満足度

Benesse 教育研究開発センター (2009)¹⁾で用いられた日頃の時間の使い方に関する満足度を聞く質問項目。時間の使い方を100点満点で評定し、0点から100点までの10点刻みの11段階の中から選択する。

④ 卒業後の進路

次の選択肢の中から進路について選択する。(1) 民間企業, (2) 公務員, (3) 教師, 弁護士, 会計士などの専門職, (4) 自営など上記以外の就職, (5) 大学院進学, (6) その他, (7) 決めていない。

(A) 現在持っている卒業後の希望進路 (複数回答可)

(B) 既に決定している進路 (1つだけ選択)

⑤ 大学在学中の目標の重要度

大学在学中の下記の7つの目標の重要性について, 5件法 (「1. 重要でない」から「5. 最も重要である」) で回答を求めた。(1) 将来の仕事に活かせる能力を身につける, (2) 資格試験・公務員試験などに合格する, (3) 専門分野の知識・理解を深める, (4) 広い教養, ものの見方を身につける, (5) 自分の将来の方向を見つける, (6) 社会人になるまでの時間をエンジョイする, (7) 有意義な人間関係を築く。

⑥ 大学在学中の目標の実行度

上記の7つの目標について, どれぐらい実行できているかを5件法 (「1. 全くできていない」から「5. とてもよくできている」) で回答を求めた。

⑦ 自己効力感尺度

三好 (2003)⁹⁾が作成した人格特性自己効力感尺度 (SMSGSE) 6項目 (「どんな状況に直面しても, 私ならうまくそれに対処することができる」「私にとって, 最終的にはできないことが多いと思う」など) に対して, 「1. 全く当てはまらない」から「5. 非常に当てはまる」までの5件法で回答を求めた。

⑧ 目標意識尺度

都筑 (1999)²⁰⁾が作成した目標意識尺度35項目6下位尺度の中から, 3つの下位尺度 (将来への希望, 時間管理, 計画性) の20項目に対して, 「1. 全くそう思わない」から「5. とてもそう思う」までの5件法で回答を求めた。

⑨ アルバイト

現在アルバイトをしているかどうかを尋ねる項目, アルバイトの内容に関連した項目 (深夜時間帯のアルバイト, 複数のアルバイトの掛け持ち, 中央大学内でのアルバイト, 授業とアルバイトとの重なり) に対して, 「はい」か「いいえ」の2件法で回答を求めた。

次に, アルバイトについての意識を尋ねる4項目に対して, 「1. 全然当てはまらない」から「5. 非常に当てはまる」までの5件法で回答を求めた。

2.3 調査期日

2011年7月

2.4 調査手続き

質問紙に回答するかどうかは自己決定できることを伝えた上で、授業時間内に質問紙を配布して調査を実施した。

[都筑 学]

3. 結果と考察

3.1 大学生生活の過ごし方

3.1.1 大学生生活の過ごし方のタイプ

大学生生活の過ごし方17項目について主因子法、プロマックス回転による因子分析をおこない、固有値1以上の5因子を抽出した。さらに因子負荷量.30以上の項目に対して因子分析を繰り返しておこなったところ、表3-1-1に示されるような解釈可能な4因子が抽出された。

第1因子には、「勉強のための本（新書や専門書など）を読む」「授業とは関係のない勉強を自主的にする」「新聞を読む」の因子負荷が高かったので、「授業外の自主的勉強」因子と命名した。

第2因子には、「異性の友だちと交際する」「同性の友だちと交際する」「コンパや懇親会などに参加する」「クラブ・サークル活動・部活動をする」の因子負荷が高かったので、「対人交際」因子と命名した。

第3因子には、「ゲーム（ゲーム機・コンピュータゲームなど）をする」「マンガや雑誌を読む」「インターネットサーフィンをする」の因子負荷が高かったので、「インターネット・マンガ・ゲーム」因子と命名した。

第4因子には、「大学で授業や実験に参加する」「授業に関する勉強（予習や復習、課題など）をする」の因子負荷が高かったので、「大学の授業・勉強」因子と命名した。

次に、大学生生活の過ごし方のタイプを明らかにするために、4つの下位尺度の合成得点にもとづいて、ward法によるクラスタ分析をおこなった。3～6クラスタを検討したところ、6クラスタが最も適当であると考えられた。

6クラスタを独立変数、4下位尺度の得点を従属変数とする一要因の分散分析をおこなったところ、「授業外の自主的勉強」($F(5,973)=82.33, p<.001$), 「対人交際」($F(5,973)=$

表 3-1-1 大学生生活の過ごし方の因子分析

	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
1. 勉強のための本（新書や専門書など）を読む	.808	.003	.041	-.002
7. 授業とは関係のない勉強を自主的にする	.570	.035	-.050	-.036
4. 新聞を読む	.478	-.032	.043	-.035
3. 異性の友だちと交際する	.107	.646	-.067	-.059
13. 同性の友だちと交際する	-.036	.643	-.090	.223
12. コンパや懇親会などに参加する	.028	.500	.181	-.148
6. クラブ・サークル活動・部活動をする	-.145	.364	.067	-.017
8. ゲーム（ゲーム機・コンピュータゲームなど）をする	-.069	-.059	.692	-.012
11. マンガや雑誌を読む	.014	.166	.488	-.009
2. インターネットサーフィンをする	.151	-.034	.444	.161
14. 大学で授業や実験に参加する	-.094	.002	.069	.802
10. 授業に関する勉強（予習や復習、課題など）をする	.315	-.079	-.053	.352
因子間相関	因子 1	.060	.241	.189
	因子 2		.109	.253
	因子 3			.102

表 3-1-2 6 クラスタにおける大学生生活の過ごし方 4 下位尺度の得点

	授業外の自主的 勉強			対人交際		インターネット・ マンガ・ゲーム		大学の授業・勉強	
	N	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
1	117	2.05	0.91	2.05	0.58	2.05	0.65	2.13	0.75
2	104	3.47	0.94	2.34	0.79	2.54	0.63	5.36	0.89
3	277	1.68	0.53	2.94	0.90	2.33	0.87	4.97	0.84
4	172	2.17	1.08	4.85	1.01	2.81	0.88	5.02	1.04
5	159	2.13	0.92	3.53	0.68	2.57	0.70	2.99	0.72
6	150	2.98	1.14	3.53	1.35	4.76	1.04	4.46	1.25

171.47, $p < .001$), 「インターネット・マンガ・ゲーム」 ($F(5, 973) = 210.43$, $p < .001$), 「大学の授業・勉強」 ($F(5, 973) = 267.49$, $p < .001$) において主効果が有意であった。

表 3-1-2 には、それぞれのクラスタにおける 4 つの下位尺度の平均値と SD を示してある。LSD 法による多重比較をおこなったところ、「授業外の自主的勉強」においては、クラスタ $2 > 6 > 4 = 5 = 1 > 3$ ($p < .05$) という順で平均値が高かった。「対人交際」においては、クラスタ $4 > 5 = 6 > 3 > 2 > 1$ ($p < .05$) という順で平均値が高かった。「インターネット・マンガ・ゲーム」においては、クラスタ $6 > 4 > 5 = 2 > 3 > 1$ ($p < .05$), 「大学の

「授業・勉強」においては、 $2 > 4 = 3 > 6 > 5 > 1$ ($p < .05$) という順で平均値が高かった。

図3-1-1には、大学生生活の過ごし方4下位尺度における各クラスターの得点（平均値）を総計得点（平均値）から差し引いた得点を示した。プラス方向は全体の平均よりも相対的に高く、その活動をおこなっている程度が多いことをあらわしている。その逆に、マイナス方向は全体の平均よりも相対的に低く、その活動をおこなっている程度が少ないことをあらわしている。

クラスター1（117人）は、「授業外の自主的勉強」「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」「大学の授業・勉強」のいずれにおいても全体平均よりも少なかった。このクラスターは、6つのクラスターの中で、「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」「大学の授業・勉強」の時間が、最も少なかった。授業にもあまり出席せず、大学生活における活動が不活発な群であるといえるだろう。

クラスター2（104人）は、「授業外の自主的勉強」と「大学の授業・勉強」が全体平均よりも多く、「対人交際」と「インターネット・マンガ・ゲーム」は全体平均よりも少なかった。このクラスターは、6つのクラスターの中で、「授業外の自主的勉強」と「大学の授業・勉強」の時間が、最も多かった。授業や授業外の勉強に積極的に取り組んでいる群であるといえるだろう。

クラスター3（277人）は、「大学での授業・勉強」が全体平均よりも多かったが、それ以外の「授業外の自主的勉強」「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」は全体平均よりも少なかった。このクラスターは、6つのクラスターの中で、「授業外の自主的勉強」の時間が、最も少なかった。大学の授業には熱心に出席するが、自発的な学習にはあまり取り組まない群であ

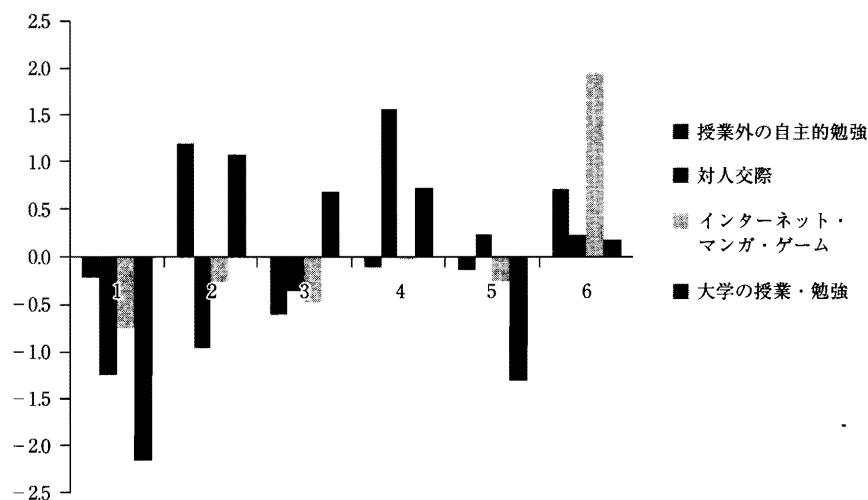


図3-1-1 各クラスターにおける得点（総計得点からの差）

るといえるだろう。

クラスタ4 (172人) は、「対人交際」と「大学の授業・勉強」が全体平均よりも多く、「授業外の自主的勉強」と「インターネット・マンガ・ゲーム」は全体平均とほぼ同じだった。このクラスタは、6つのクラスタの中で、「対人交際」の時間が最も多かった。大学の授業に出席しつつ、サークルや友人との交際を活発に繰り返している群であるといえるだろう。

クラスタ5 (159人) は、「対人交際」が全体平均よりも多かったが、「授業外の自主的勉強」「インターネット・マンガ・ゲーム」「大学の授業・勉強」は全体平均よりも少なかった。このクラスタは、6つのクラスタの中で、「大学の授業・勉強」の時間が、クラスタ1に次いで2番目に少なかった。大学生活における活動に対して消極的な群であるといえるだろう。

クラスタ6 (150人) は、「授業以外の自主的勉強」「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」「大学での授業・勉強」のいずれも全体平均よりも多かった。このクラスタは、6つのクラスタの中で、「インターネット・マンガ・ゲーム」の時間が最も多く、「授業外の自主的勉強」の時間は、クラスタ2に次いで2番目に多かった。インターネット等のヴァーチャルな活動を中心に過ごしている群であるといえるだろう。

次に、それぞれのクラスタに属する学生の大学生活における活動の特徴を明らかにするために、「授業外の自主的勉強」「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」「大学の授業・勉強」の相対的な割合を計算した。その前提として、大学生活の過ごし方に関して、「全然ない→0時間」「1時間未満→1時間」「1～2時間→1.5時間」「3～5時間→4時間」「6～10時間→8時間」「11～15時間→13時間」「16～20時間→18時間」「21時間以上→21時間」と換算して、各項目の時間数を算出し、「授業外の自主的勉強」「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」「大学の授業・勉強」に関して、それぞれの時間数を求めた。表3-1-3に示したのが、その結果である。クラスタ4とクラスタ6が最も合計時間数が多く、次いで、クラスタ2、クラスタ3、クラスタ5という順になっており、クラスタ1が最も合計時間数が少なかった。

さらに、「授業外の自主的勉強」「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」「大学の授業・勉強」の時間数を4つの活動の合計時間数で割って、それぞれの活動をおこなっている時間の相対的な割合を求めた。図3-1-2に示したのが、その結果である。

図3-1-2から明らかなように、クラスタ4とクラスタ5およびクラスタ1においては、「対人交際」の占める割合が最も多かった。クラスタ2とクラスタ3においては「大学での授業・勉強」の占める割合が最も多かったが、「授業外の自主的勉強」の占める割合は、クラスタ2の方がクラスタ3よりも4倍以上多かった。

以上のような結果を総合的にふまえて、クラスタ1を活動全般低下群，クラスタ2を主体的勉強群，クラスタ3を授業出席勉強群，クラスタ4を対人活動中心群，クラスタ5を授業回避群，クラスタ6をヴァーチャル活動群と名付けた。

表3-1-3 大学生生活の過ごし方6クラスタにおける4つの活動の時間数 (単位：時間)

	授業外の自主的 勉強	対人交際	インターネット・ マンガ・ゲーム	大学の授業・ 勉強	総計
クラスタ1	4.0	5.7	3.6	2.6	15.9
クラスタ2	12.5	8.5	6.7	21.3	48.9
クラスタ3	2.1	13.4	5.5	19.3	40.4
クラスタ4	4.9	36.4	8.9	19.9	70.0
クラスタ5	4.5	18.0	5.8	6.2	34.5
クラスタ6	9.9	20.8	25.3	16.0	71.9

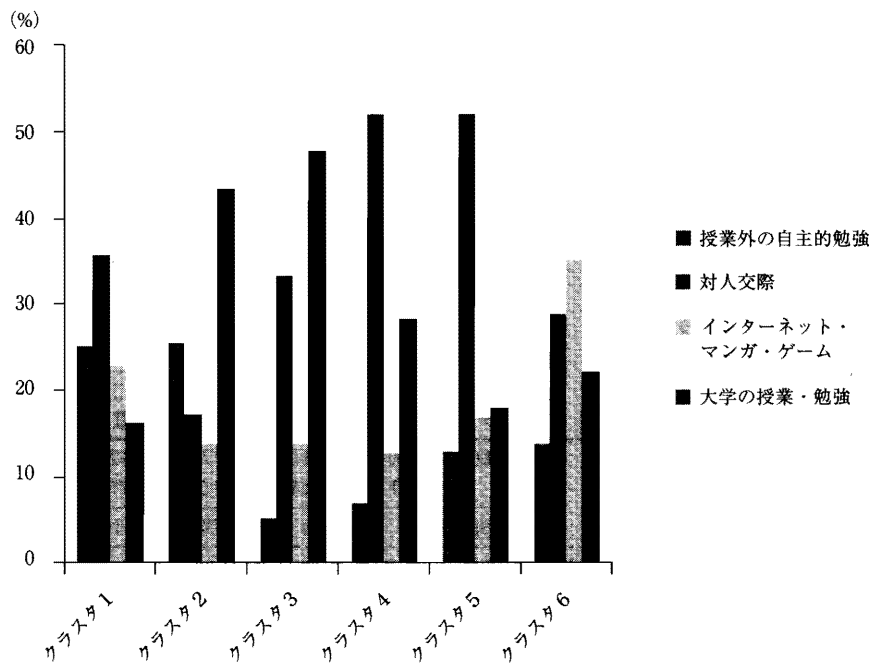


図3-1-2 6クラスタにおける活動時間の割合

3.1.2 大学生生活の過ごし方のタイプと在学中の目標の重要度・実行度との関連

表3-1-4に示したのは、大学生生活の過ごし方6タイプにおける在学中の7つの目標の重要度の評定得点である。一要因の分散分析の結果、「将来の仕事に活かせる能力を身につける」($F(5, 967) = 2.26, p < .05$), 「専門分野の知識・理解を深める」($F(5, 957) = 3.29, p < .01$), 「広い教養, ものの見方を身につける」($F(5, 963) = 4.42, p < .001$), 「社会人になるまでの時間をエンジョイする」($F(5, 964) = 6.22, p < .001$), 「有意義な人間関係を築く」($F(5, 964) = 6.45, p < .001$)の主効果が有意だった。「資格試験・公務員試験などに合格する」($F(5, 961) = 1.44, n.s.$), 「自分の将来の方向を見つける」($F(5, 966) = 2.00, n.s.$)では有意な主効果が認められなかった。

LSD法による多重比較の結果、「将来の仕事に活かせる能力を身につける」に関して、活動全般低下群は主体的勉強群, 授業出席勉強群, 対人活動中心群よりも有意に得点が低かった($p < .05$)。

「専門分野の知識・理解を深める」に関して、授業回避群は主体的勉強群, 授業出席勉強群, 対人活動中心群, ヴァーチャル活動群よりも有意に得点が低かった($p < .05$)。

「広い教養, ものの見方を身につける」に関して、対人活動中心群は活動全般低下群, 授業出席勉強群, 授業回避群, ヴァーチャル活動群よりも有意に得点が高かった($p < .05$)。主体的勉強群は活動全般低下群, 授業回避群よりも有意に得点が高かった($p < .05$)。

「社会人になるまでの時間をエンジョイする」に関して、主体的勉強群は授業出席勉強群, 対人活動中心群, 授業回避群, ヴァーチャル活動群よりも有意に得点が低かった($p < .05$)。対人活動中心群は活動全般低下群, 授業出席勉強群, ヴァーチャル活動群よりも有意に得点が高かった($p < .05$)。

表3-1-4 大学生生活の過ごし方の6タイプにおける大学在学中の目標の重要度の得点

	活動全般 低下群		主体的 勉強群		授業出席 勉強群		対人活動 中心群		授業回避 群		ヴァーチャ ル活動群	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
将来の仕事に活かせる能力を身につける	3.57	1.26	3.91	1.15	3.92	1.06	3.92	1.07	3.79	1.15	3.72	1.10
資格試験・公務員試験などに合格する	3.22	1.20	3.53	1.28	3.40	1.17	3.31	1.19	3.18	1.12	3.32	1.24
専門分野の知識・理解を深める	3.58	1.12	3.85	0.98	3.67	1.03	3.73	0.93	3.38	1.09	3.64	1.03
広い教養, ものの見方を身につける	3.83	1.18	4.22	1.06	4.06	1.00	4.28	0.87	3.87	1.13	3.97	1.04
自分の将来の方向を見つける	3.82	1.13	3.93	1.24	4.12	1.07	4.15	0.98	3.94	1.13	4.03	1.06
社会人になるまでの時間をエンジョイする	3.62	1.22	3.35	1.21	3.84	1.08	4.06	0.94	3.83	1.14	3.68	1.15
有意義な人間関係を築く	3.99	1.16	3.77	1.18	4.13	1.04	4.44	0.84	4.14	1.05	3.98	1.04

「有意義な人間関係を築く」に関して、対人活動中心群は活動全般低下群、主体的勉強群、授業出席勉強群、授業回避群、ヴァーチャル活動群よりも有意に得点が高かった ($p < .05$)。主体的勉強群は授業出席勉強群、授業回避群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。

以上の結果から、次のようなことがわかった。主体的勉強群は、大学において社会人になるための時間をエンジョイしたり有意義な人間関係を築いたりするよりは、教養やものの見方を身につけることを重要であると考えていた。それとやや対照的に、対人活動中心群は、大学において、教養やものの見方を身につけると同時に、時間をエンジョイしたり人間関係を築いたりすることが重要であると考えていた。活動全般低下群は、大学で将来の仕事に活かせる能力を身につけることの重要性を低く見積もり、授業回避群は、専門分野の知識・理解を深めることの重要性を低く見積もっていた。

表 3-1-5 に示したのは、大学生生活の過ごし方 6 タイプにおける在学中の 7 つの目標の実行度の評定得点である。一要因の分散分析の結果、「将来の仕事に活かせる能力を身につける」($F(5, 965) = 5.19, p < .001$)、「資格試験・公務員試験などに合格する」($F(5, 963) = 6.71, p < .001$)、「専門分野の知識・理解を深める」($F(5, 960) = 9.14, p < .001$)、「広い教養、ものの見方を身につける」($F(5, 959) = 5.79, p < .001$)、「自分の将来の方向を見つける」($F(5, 961) = 5.77, p < .001$)、「社会人になるまでの時間をエンジョイする」($F(5, 963) = 12.09, p < .001$)、「有意義な人間関係を築く」($F(5, 964) = 9.09, p < .001$)の主効果が有意だった。

LSD 法による多重比較の結果、「将来の仕事に活かせる能力を身につける」に関して、主体的勉強群は活動全般低下群、授業出席勉強群、対人活動中心群、授業回避群、ヴァーチャル活動群よりも有意に得点が高かった ($p < .05$)。授業出席勉強群は授業回避群、ヴァーチャル活

表 3-1-5 大学生生活の過ごし方の 6 タイプにおける大学在学中の目標の実行度の得点

	活動全般 低下群		主体的勉 強群		授業出席 勉強群		対人活動 中心群		授業回避 群		ヴァーチャ ル活動群	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
将来の仕事に活かせる能力を身につける	2.60	1.03	3.07	1.01	2.47	1.02	2.62	1.07	2.73	1.07	2.70	1.12
資格試験・公務員試験などに合格する	2.27	1.13	2.72	1.27	2.03	1.06	2.02	1.13	2.17	1.20	2.36	1.33
専門分野の知識・理解を深める	2.72	1.02	3.43	0.95	2.72	0.99	2.75	1.03	2.68	1.10	2.94	1.10
広い教養、ものの見方を身につける	2.95	0.98	3.42	0.96	2.92	0.94	3.12	0.98	3.00	1.06	3.27	1.05
自分の将来の方向を見つける	2.90	1.11	3.47	1.01	2.79	1.10	3.04	1.12	3.03	1.13	3.05	1.27
社会人になるまでの時間をエンジョイする	3.05	1.05	3.27	1.06	3.55	1.04	3.98	0.99	3.59	1.11	3.52	1.12
有意義な人間関係を築く	3.25	1.11	3.37	1.08	3.68	0.99	3.97	0.93	3.72	1.01	3.49	1.10

動群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。

「資格試験・公務員試験などに合格する」に関して、主体的勉強群は活動全般低下群、授業出席勉強群、対人活動中心群、授業回避群、ヴァーチャル活動群よりも有意に得点が高かった ($p < .05$)。授業出席勉強群はヴァーチャル活動群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。

「専門分野の知識・理解を深める」に関して、主体的勉強群は活動全般低下群、授業出席勉強群、対人活動中心群、授業回避群、ヴァーチャル活動群よりも有意に得点が高かった ($p < .05$)。授業出席勉強群と授業回避群は、ヴァーチャル活動群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。

「広い教養、ものの見方を身につける」に関して、主体的勉強群は活動全般低下群、授業出席勉強群、対人活動中心群、授業回避群よりも有意に得点が高かった ($p < .05$)。活動全般低下群と授業出席勉強群は、ヴァーチャル活動群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。授業出席勉強群は対人活動中心群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。

「自分の将来の方向を見つける」に関して、主体的勉強群は活動全般低下群、授業出席勉強群、対人活動中心群、授業回避群、ヴァーチャル活動群よりも有意に得点が高かった ($p < .05$)。

「社会人になるまでの時間をエンジョイする」に関して、対人活動中心群は活動全般低下群、主体的勉強群、授業出席勉強群、授業回避群、ヴァーチャル活動群よりも有意に得点が高かった ($p < .05$)。活動全般低下群は主体的勉強群、ヴァーチャル活動群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。主体的勉強群は授業出席勉強群、授業回避群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。

「有意義な人間関係を築く」に関して、対人活動中心群は活動全般低下群、主体的勉強群、授業出席勉強群、授業回避群、ヴァーチャル活動群よりも有意に得点が高かった。活動全般低下群と主体的勉強群は、授業出席勉強群や授業回避群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。

以上のことから、次のようなことがわかった。主体的勉強群は、目標を実行しているという自己評価が最も高く、それとは対照的に、授業出席勉強群は自己評価が最も低かった。対人活動中心群は時間をエンジョイする、有意義な人間関係を築くという目標を実行していると自己評価しており、それと対照的に、活動全般低下群は、それらの点での自己評価が低かった。

表3-1-6に示したのは、目標の重要度と実行度との間のズレである。各個人における目標の重要度の得点から目標の実行度の得点を引いた値を算出した。この得点は、「重要度-実行度」をあらわしており、得点が大きいほど、個人が重要であると考えた目標についての実行度

表3-1-6 大学生生活の過ごし方の6タイプにおける大学在学中の目標の重要度と実行度の差異得点

	活動全般 低下群		主体的 勉強群		授業出席 勉強群		対人活動 中心群		授業回避 群		ヴァーチャ ル活動群	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
将来の仕事に活かせる能力を身につける	-1.00	1.38	-0.85	1.23	-1.45	1.33	-1.29	1.31	-1.08	1.42	-1.05	1.43
資格試験・公務員試験などに合格する	-0.97	1.26	-0.81	1.37	-1.37	1.40	-1.29	1.35	-1.01	1.46	-0.97	1.41
専門分野の知識・理解を深める	-0.89	1.36	-0.40	1.06	-0.95	1.25	-0.98	1.28	-0.69	1.29	-0.72	1.21
広い教養、もの見方を身につける	-0.94	1.19	-0.80	1.11	-1.14	1.26	-1.16	1.24	-0.89	1.29	-0.71	1.37
自分の将来の方向を見つける	-0.94	1.42	-0.46	1.43	-1.32	1.51	-1.10	1.37	-0.93	1.37	-0.99	1.62
社会人になるまでの時間をエンジョイする	-0.59	1.19	-0.08	1.27	-0.30	1.41	-0.07	1.17	-0.25	1.31	-0.17	1.23
有意義な人間関係を築く	-0.77	1.22	-0.40	1.21	-0.45	1.29	-0.46	1.04	-0.43	1.22	-0.50	1.24

が低いことを示している。

一要因の分散分析をおこなったところ、「将来の仕事に活かせる能力を身につける」(F(5,961)=4.58, $p<.001$), 「資格試験・公務員試験などに合格する」(F(5,954)=4.10, $p<.001$), 「専門分野の知識・理解を深める」(F(5,948)=3.98, $p<.001$), 「広い教養、もの見方を身につける」(F(5,952)=3.59, $p<.01$), 「自分の将来の方向を見つける」(F(5,956)=5.66, $p<.001$), 「社会人になるまでの時間をエンジョイする」(F(5,957)=2.86, $p<.05$), 「有意義な人間関係を築く」(F(5,957)=1.46, n.s.) において有意な主効果が見られた。表3-1-6から明らかのように、全般的に、重要性の評価に比して目標は実行されていないが、群間に差があるといえる。

LSD法による多重比較の結果、「将来の仕事に活かせる能力を身につける」に関して、授業出席勉強群は活動全般低下群、主体的勉強群、授業回避群、ヴァーチャル活動群よりも有意に差異得点が大きかった ($p<.05$)。主体的勉強群は対人活動中心群よりも有意に差異得点が小さかった ($p<.05$)。

「資格試験・公務員試験などに合格する」に関して、授業出席勉強群は活動全般低下群、主体的勉強群、授業回避群、ヴァーチャル活動群よりも有意に差異得点が大きかった ($p<.05$)。主体的勉強群は対人活動中心群、ヴァーチャル活動群よりも有意に差異得点が小さかった ($p<.05$)。

「専門分野の知識・理解を深める」に関して、主体的勉強群は活動全般低下群、授業出席勉強群、対人活動中心群、ヴァーチャル活動群よりも有意に差異得点が小さかった ($p<.05$)。授業出席勉強群と対人活動中心群は、授業回避群よりも有意に差異得点が大きかった ($p<.05$)。

「広い教養、ものの見方を身につける」に関して、主体的勉強群は授業出席勉強群、対人活動中心群よりも有意に差異得点が小さかった ($p < .05$)。授業出席勉強群は、授業回避群やヴァーチャル活動群よりも有意に差異得点が大きかった ($p < .05$)。対人活動中心群はヴァーチャル活動群よりも有意に差異得点が大きかった ($p < .05$)。

「自分の将来の方向を見つける」に関して、主体的勉強群は活動全般低下群、授業出席勉強群、対人活動中心群、授業回避群、ヴァーチャル活動群よりも有意に差異得点が小さかった ($p < .05$)。授業出席勉強群は活動全般低下群、授業回避群、ヴァーチャル活動群よりも有意に差異得点が大きかった ($p < .05$)。

「社会人になるまでの時間をエンジョイする」に関して、活動全般低下群は主体的勉強群、授業出席勉強群、対人活動中心群、授業回避群、ヴァーチャル活動群よりも有意に差異得点が大きかった ($p < .05$)。

以上のことから、主体的勉強群は重要な目標を実行しているという意識が最も強く、授業出席勉強群では、その意識が最も低かった。同じように勉強に取り組んでいても、それが自主的なものであるかどうかということによって、目標への取り組み方に大きな差異が生じることが明らかである。この傾向は、西垣 (2008) が明らかにした、自習時間の少ない学生において学力や応用力、思考力が獲得できていないと自己評価していたという結果と合致するものである。活動全般低下群では、社会人になるまでの時間をエンジョイしている点で、他の群に比べて実行できていないと意識していることがわかった。

[金子泰之]

3.2 時間の使い方の満足度

3.2.1 時間の使い方満足度3群における大学在学中の目標の重要度

表3-2-1に、時間の使い方満足度3群における在学中の目標の重要度についての平均値を示した。これにもとづき、時間の使い方満足度3群を独立変数、在学中の目標の重要度を従属変数として、1要因の分散分析をおこなったところ、「将来の仕事に活かせる能力を身につける」($F(2, 1087) = 4.16, p < .05$)、「資格試験・公務員試験などに合格する」($F(2, 1082) = 7.34, p < .001$)、「広い教養、ものの見方を身につける」($F(2, 1082) = 3.22, p < .05$)という目標において、有意な主効果が見られた。

LSD法による多重比較の結果からは、次のようなことがわかった。「将来の仕事に活かせる能力を身につける」に関しては、時間の使い方満足度の中群が高群よりも有意に得点が高かった ($p < .05$)。「資格試験・公務員試験などに合格する」に関しては、時間の使い方満足度の

表 3-2-1 時間の使い方の満足度 3 群における大学在学中の目標の重要度

	低群 (N=212)		中群 (N=769)		高群 (N=109)		合計 (N=1090)	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
将来の仕事に活かせる能力を身につける	3.70	1.13	3.89	1.06	3.65	1.38	3.83	1.11
資格試験・公務員試験などに合格する	3.29	1.17	3.41	1.16	2.95	1.37	3.34	1.19
専門分野の知識・理解を深める	3.59	1.08	3.68	1.00	3.50	1.18	3.64	1.04
広い教養、ものの見方を身につける	3.98	1.08	4.10	0.99	3.85	1.29	4.05	1.04
自分の将来の方向を見つける	4.01	1.12	4.04	1.06	4.03	1.18	4.03	1.09
社会人になるまでの時間をエンジョイする	3.75	1.22	3.77	1.08	3.88	1.18	3.77	1.12
有意義な人間関係を築く	4.00	1.18	4.16	0.98	4.03	1.17	4.11	1.05

低群、中群ともに高群よりも有意に得点が高かった ($p < .05$)。「広い教養、ものの見方を身につける」に関しては、時間の使い方満足度の中群が高群よりも有意に得点が高かった ($p < .05$)。

以上の結果から、「将来の仕事に活かせる能力を身につける」という目標については、時間の使い方満足度高群よりも、中群のほうがより強く意識していることがわかった。さらに、「資格試験・公務員試験などに合格する」という目標については、時間の使い方満足度の低群、中群のほうが高群よりも高い意識を持っていることがわかった。「広い教養、ものの見方を身につける」という目標についても、時間の使い方満足度中群が、高群よりも目標意識を高く持っていた。

つまり、時間の使い方の満足度が低いほど、「将来の仕事に活かせる能力を身につける」「資格試験・公務員試験などに合格する」「広い教養、ものの見方を身につける」という目標に高い意識を持っていることが明らかになった。

3.2.2 時間の使い方満足度 3 群における大学在学中の目標の実行度

表 3-2-2 には、時間の使い方満足度 3 群における在学中の目標の実行度の平均値を示した。これにもとづき、時間の使い方満足度 3 群を独立変数、在学中の目標の実行度を従属変数として、1 要因の分散分析をおこなったところ、「将来の仕事に活かせる能力を身につける」($F(2, 1084) = 45.77, p < .001$)、「資格試験・公務員試験などに合格する」($F(2, 1082) = 9.52, p < .001$)、「専門分野の知識・理解を深める」($F(2, 1076) = 26.41, p < .001$)、「広い教養、ものの見方を身につける」($F(2, 1077) = 32.89, p < .001$)、「自分の将来の方向を見つける」($F(2, 1078) = 39.74, p < .001$)、「社会人になるまでの時間をエンジョイする」($F(2, 1082) = 24.31, p < .001$)、「有意義な人間関係を築く」($F(2, 1083) = 21.46, p < .001$)と

表 3-2-2 時間の使い方の満足度 3 群と大学在学中の目標の実行度

	低群 (N=212)		中群 (N=769)		高群 (N=109)		合計 (N=1090)	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
将来の仕事に活かせる能力を身につける	2.10	0.99	2.73	1.00	3.17	1.23	2.65	1.07
資格試験・公務員試験などに合格する	1.90	1.13	2.26	1.16	2.43	1.42	2.21	1.19
専門分野の知識・理解を深める	2.37	1.03	2.90	1.01	3.08	1.15	2.82	1.05
広い教養、ものの見方を身につける	2.61	1.00	3.14	0.95	3.44	1.07	3.07	1.00
自分の将来の方向を見つける	2.44	1.14	3.06	1.08	3.51	1.18	2.99	1.14
社会人になるまでの時間をエンジョイする	3.11	1.21	3.56	1.02	3.95	1.09	3.51	1.09
有意義な人間関係を築く	3.22	1.17	3.69	0.96	3.88	1.10	3.62	1.04

いう項目に、有意な主効果が見られた。

LSD 法による多重比較の結果からは、次のような特徴が明らかになった。「将来の仕事に活かせる能力を身につける」という目標の実行度については、時間の使い方満足度低群が中群、高群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。時間の使い方満足度中群が高群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。「資格試験・公務員試験などに合格する」という目標の実行度については、時間の使い方満足度低群が中群、高群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。「専門の知識・理解を深める」という目標の実行度については、時間の使い方満足度低群が中群、高群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。「広い教養、ものの見方を身につける」という目標の実行度については、時間の使い方満足度低群が中群、高群よりも有意に得点が低く ($p < .05$)、中群が高群よりも有意に得点が低かった ($P < .01$)。「自分の将来の方向を見つける」という目標の実行度については、時間の使い方満足度低群が中群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。「自分の将来の方向を見つける」という目標の実行度については、時間の使い方満足度低群が高群よりも有意に得点が低く ($p < .05$)、中群が高群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。「社会人になるまでの時間をエンジョイする」という目標の実行度については、時間の使い方満足度低群が中群、高群よりも有意に得点が低く ($p < .05$)、中群が高群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。「有意義な人間関係を築く」という目標の実行度については、時間の使い方満足度低群が中群、高群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。

以上の結果から、「将来の仕事に活かせる能力を身につける」という項目においては、時間の使い方満足度の高群が低群、中群よりもより実行できていることがわかった。「資格試験・公務員試験などに合格する」という目標については、時間の使い方の満足度が高ければ高いほど、実行できている傾向にあることがわかった。「専門分野の知識・理解を深める」という目標については、時間の使い方の満足度低群が、中群、高群よりも実行度が低かった。「広い教

養、ものの見方を身につける」という目標については、時間の使い方の満足度低群が、中群・高群よりも実行度が低く、中群が高群よりも実行度が低いことがわかった。「自分の将来の方向を見つける」という目標については、時間の使い方の満足度低群が、中群、高群よりも実行度が低く、中群が高群よりも実行度が低いことがわかった。「社会人になるまでの時間をエンジョイする」という目標については、時間の使い方の満足度低群が中群、高群よりも実行度が低く、中群が高群よりも実行度が低かった。「有意義な人間関係を築く」という目標については、時間の使い方の満足度低群が、中群、高群よりも実行度が低かった。

以上の結果から、時間の使い方の満足度が高くなればなるほど、「将来の仕事に活かせる能力を身につける」「資格試験・公務員試験などに合格する」「専門分野の知識・理解を深める」「広い教養、ものの見方を身につける」「自分の将来の方向を見つける」「社会人になるまでの時間をエンジョイする」「有意義な人間関係を築く」という目標において、実行度がより高くなる傾向にあることが明らかになった。

3.2.3 時間の使い方満足度3群における自己効力感・将来への希望・計画性・時間管理

表3-2-3には、時間の使い方満足度3群における自己効力感・将来への希望・計画性・時間管理の平均値を示した。これにもとづき、時間の使い方満足度3群を独立変数、自己効力感・将来への希望・計画性・時間管理を従属変数として一要因の分散分析をしたところ、自己効力感 ($F(2, 1078) = 38.58, p < .001$)、将来への希望 ($F(2, 1046) = 50.12, p < .001$)、計画性 ($F(2, 1061) = 36.38, p < .001$)、時間管理 ($F(2, 1058) = 77.78, p < .001$) のすべてに有意な主効果が見られた。

LSD法による多重比較をおこなった結果、次のことが明らかになった。自己効力感について、時間の使い方満足度低群が中群、高群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。中群は低群よりも有意に得点が高く ($p < .05$)、高群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。高群は、低群、中群に対して、ともに有意に得点が高かった ($p < .05$)。

表3-2-3 時間の使い方の満足度3群における自己効力感、将来への希望、計画性、時間管理

	低群 (N=212)		中群 (N=769)		高群 (N=109)		合計 (N=1090)	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
自己効力感	2.91	0.79	3.24	0.70	3.65	0.78	3.22	0.75
将来への希望	2.62	0.72	3.03	0.66	3.41	0.82	2.99	0.72
計画性	2.35	0.75	2.82	0.75	3.01	0.93	2.75	0.80
時間管理	2.24	0.74	2.79	0.75	3.34	0.85	2.74	0.81

将来への希望に関して、時間の使い方満足度低群は、中群、高群に対してともに有意に得点が低かった ($p < .05$)。中群は、低群よりも有意に点数が高く ($p < .05$)、高群よりも有意に点数が低かった ($p < .05$)。高群は、低群、中群よりも有意に得点が高かった ($p < .05$)。

計画性においては、時間の使い方満足度低群は、中群、高群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。中群は、低群よりも有意に得点が高く ($p < .05$)、高群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。高群は、低群、中群よりも有意に得点が高かった ($p < .05$)。

時間管理では、時間の使い方満足度低群は、中群、高群に対して有意に得点が低かった ($p < .05$)。中群は、低群よりも有意に得点が高く ($p < .05$)、高群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。高群は、低群、中群に対してともに有意に得点が高かった ($p < .05$)。

以上の結果より、時間の使い方の満足度が高い人ほど、自己効力感の得点が高く、将来への希望を強く持ち、計画性もより持っていることが明らかになった。

3.2.4 時間の使い方満足度3群における大学生生活の過ごし方

表3-2-4に、時間の使い方満足度3群における大学生生活の過ごし方(授業外の勉強時間数、友人・クラブサークル時間数、インターネット・マンガ・ゲーム時間数、授業の勉強時間数)の平均値を示した。これにもとづいて、時間の使い方満足度3群を独立変数、大学生生活の過ごし方(授業外の勉強時間数、友人・クラブサークル時間数、インターネット・マンガ・ゲーム時間数、授業の勉強時間数)を従属変数として一要因の分散分析をおこなったところ、授業外の勉強時間数 ($F(2, 1074) = 4.24, p < .05$)、友人・クラブサークル時間数 ($F(2, 1041) = 8.71, p < .001$)、インターネット・マンガ・ゲーム時間数 ($F(2, 1071) = 5.34, p < .01$) において有意な主効果が見られたが、授業の勉強時間数については主効果は有意でなかった。

LSD法による多重比較を実施した結果、次のことが明らかになった。授業外の勉強時間数において、時間の使い方の満足度低群は、高群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。中群は高群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。友人・クラブサークル時間数では、時間の使い方の満足度低群は高群よりも有意に得点が低く ($p < .05$)、中群は高群よりも有意に得点が低かった ($p < .05$)。インターネット・マンガ・ゲーム時間数では、低群が中群よりも有意に得点が高かった ($p < .05$)。

以上の結果より、時間の使い方の満足度が高い人の方が、授業以外の勉強に多く取り組み、友人・クラブサークルに多く時間を使っていることがわかった。さらに、時間の使い方の満足度が低くなるにつれ、インターネット・マンガ・ゲームに時間をより使っていることがわかった。

表 3-2-4 時間の使い方の満足度 3 群における大学生生活の過ごし方の時間数

	低群 (N=212)		中群 (N=769)		高群 (N=109)		合計 (N=1090)	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
授業外の勉強時間数	4.64	7.22	5.45	7.22	7.28	10.59	5.47	7.64
友人・クラブサークル時間数	17.35	14.92	17.17	13.40	23.46	19.82	17.83	14.56
インターネット・マンガ・ゲーム時間数	10.97	11.34	8.41	8.50	8.96	12.62	8.96	9.63
授業の勉強	14.43	8.82	15.41	8.85	13.53	9.67	15.03	8.94

〔早川宏子・早川みどり〕

3.3 進路選択

3.3.1 進路希望との関連について

表 3-3-1 は調査対象者の進路希望状況について、進路希望未決定、1つの進路希望に限定、進路希望が複数あるケースの3つのカテゴリーに分け、カテゴリーごとの時間の使い方の満足度について比較したものである。進路希望状況を独立変数、時間の使い方の満足度を従属変数として、一要因の分散分析をおこなったところ、有意な差は見られなかった。

次に、自己効力感、将来への希望、計画性、時間管理の各質問紙の尺度得点と進路希望状況について検討をおこなった。表 3-3-2 にもとづき、進路決定状況を独立変数、各質問紙尺度得点を従属変数として一要因の分散分析をおこなったところ、将来への希望 ($F(2, 1093) =$

表 3-3-1 各進路の決定状況における時間の使い方の満足度

	N	平均	SD
進路希望未決定	167	5.13	2.38
1つの進路希望に決定	399	5.18	2.13
進路希望が複数	530	5.27	1.88

表 3-3-2 進路の決定状況における、各種質問紙尺度得点の比較

	進路希望未決定		1つの進路希望に決定		進路希望が複数	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
自己効力感	3.21	0.79	3.24	0.73	3.20	0.75
将来への希望	2.96	0.81	3.07	0.68	2.94	0.71
計画性	2.68	0.84	2.78	0.79	2.74	0.79
時間管理	2.73	0.87	2.76	0.82	2.71	0.79

3.74, $p < .05$) において有意な主効果が見られた。LSD 法による多重比較をおこなったところ、進路希望が複数ある学生よりも進路希望を1つに決定している学生の方が有意に得点が高かった ($p < .05$)。すでに1つの進路希望へ絞っている学生は、目標が明確になっているだけに、自己の将来へ希望を持って行動していると考えられる。

3.3.2 進路内容の詳細について

1つの進路希望に決定している学生が、どのような分野を志望しているかを分析したところ、民間企業242名、公務員62名、教師、弁護士、会計士などの専門職56名、自営業7名、大学院13名、その他24名の内訳となった(表3-3-3)。6割の学生が民間企業を、それぞれ約1割5分の学生が公務員もしくは専門職の就職を志望していることがわかった。

そこで希望の多かった民間企業、公務員、専門職の3カテゴリー別に、対象学生の生活の過ごし方を分析することにした。表3-3-4にもとづき、進路希望分野を独立変数、生活の過ごし方、時間の使い方の満足度を従属変数として、一要因の分散分析をおこなった。その結果、授業外の勉強時間 ($F(2, 350) = 9.31, p < .001$)、友人・クラブ・サークル時間数 ($F(2, 335)$)

表3-3-3 進路希望を1つに決定している学生の内訳

	N	%
民間企業	242	60
公務員	62	15
教師、弁護士、会計士などの専門職	56	14
自営など上記以外の形	7	2
大学院などに進学	13	3
その他	24	6
合計	404	100

表3-3-4 単一進路希望分野別における生活の時間の使い方

	民間企業			公務員			専門職		
	N	平均	SD	N	平均	SD	N	平均	SD
授業外の勉強時間	237	4.42	6.02	60	5.92	7.20	56	8.66	8.69
友人・クラブサークル時間数	226	18.63	14.01	60	14.93	13.37	52	13.89	11.87
インターネット・マンガ・ゲーム時間数	236	8.46	9.15	60	12.20	13.01	55	6.83	8.74
授業の勉強時間	230	14.59	8.73	58	14.77	9.20	50	15.29	9.97
時間の使い方の満足度	239	5.15	1.99	62	5.23	2.44	55	5.29	2.23

表 3-3-5 単一進路希望分野別における各質問紙尺度得点との比較

	民間企業			公務員			専門職		
	N	平均	SD	N	平均	SD	N	平均	SD
時間管理	237	2.85	0.74	59	2.81	0.93	55	2.54	0.90
自己効力感	240	3.24	0.72	60	3.12	0.68	54	3.37	0.68
将来への希望	232	3.06	0.65	56	3.01	0.73	55	3.17	0.66
計画性	237	2.76	0.71	60	2.72	0.96	54	2.86	0.89

=3.62, $p<.05$), インターネット・マンガ・ゲーム時間数 ($F(2, 348) = 4.81$, $p<.01$) において有意な主効果が見られた。LSD 法による多重比較をおこなったところ、授業外の勉強時間に関して、専門職志望者は民間企業志望者よりも勉強時間が有意に多く ($p<.05$), 同じく公務員志望者よりも有意に多かった ($p<.05$)。友人・クラブ・サークル活動時間に関しては、民間企業志望者が専門職志望者よりも有意に多かった ($p<.05$)。インターネット・マンガ・ゲーム時間数に関しては、公務員志望者が民間企業志望者 ($p<.05$), 専門職志望者 ($p<.05$) の両者よりも有意に多かった。専門職志望者は民間企業志望者よりも有意に授業外勉強時間が長いものの、SD の大きさから専門職志望者でも個人差があることがわかった。

次に、民間企業、公務員、専門職の3カテゴリ別に、自己効力感、将来への希望、計画性、時間管理の各尺度得点の比較をおこなった。表 3-3-5 にもとづき、進路希望分野を独立変数、各質問紙尺度得点を従属変数として、一要因の分散分析を実施したところ、時間管理尺度 ($F(2, 348) = 3.45$, $p<.05$) において有意な主効果が見られた。LSD 法における多重比較をおこなったところ、民間企業志望者は専門職志望者よりも時間管理尺度が有意に高かった ($p<.05$)。専門職志望者は勉強時間に費やす時間が多く、交友時間や娯楽時間が少ないため、時間配分に偏りがあり、それが一側面で余裕を生み、時間管理尺度の値を低くしているのかもしれない。

[村井 剛]

3.4 アルバイト

3.4.1 アルバイトの実態との関連について

表 3-4-1 は調査対象者のアルバイトの実態についてまとめたものである。実に53.9%、半数以上の学生がアルバイトを実施していることがわかった。深夜時間帯のアルバイト有無、複数のアルバイトの掛け持ち、中央大学内のアルバイト有無、授業とアルバイトの重複項目については、アルバイトをしていないと回答したパーセント分を差し引いた状態の表記になってい

表3-4-1 アルバイトの実態とその人数について

	はい		いいえ	
	N	%	N	%
現在アルバイトをしている	599	53.9	494	44.4
深夜時間帯にアルバイトしている	150	13.5	453	40.7
複数のアルバイトを掛け持ちしている	111	10.0	492	44.2
中央大学の学内でアルバイトしている	15	1.3	581	52.2
授業とアルバイトの時間が重なって困っている	58	5.2	540	48.6

表3-4-2 アルバイトの有無における生活の過ごし方（時間数）と時間の使い方満足度

	現在アルバイトをしている			
	はい		いいえ	
	平均	SD	平均	SD
授業外の勉強時間数	5.24	7.94	5.65	7.08
友人・クラブサークル時間数	19.76	15.09	15.84	14.11
インターネット・マンガ・ゲーム時間数	8.65	9.61	9.30	9.65
授業の勉強	14.94	9.12	15.07	8.79
時間の使い方の満足度	5.41	2.02	5.00	2.07

るので、合計値が100%に接近しない値となることを説明しておく。

表3-4-2は、アルバイトの有無における、生活の過ごし方と時間の使い方の満足度を比較したものである。アルバイトの有無によって生活の過ごし方や時間の使い方満足度に差が見られるかについて、t検定をおこなったところ、友人・クラブサークル時間数 ($t(1041) = 4.31$, $p < .001$)、時間の使い方の満足度 ($t(1076) = 3.24$, $p < .001$) において有意差が見られた。アルバイトをしている方が友人・クラブサークルに費やす時間数が多く、時間の使い方満足度も高いことが解釈できる結果となった。アルバイトをすることで交友関係が広がっていることが予想され、間接的に満足度を高めている可能性が考えられる。

表3-4-3は、深夜時間帯のアルバイトの有無における、生活の過ごし方と時間の使い方の満足度を比較したものである。深夜時間帯のアルバイトの有無によって生活の過ごし方や時間の使い方満足度に差が見られるかについて、t検定をおこなったところ、授業の勉強時間において有意差が見られた ($t(572) = -2.31$, $p < .05$)。深夜にアルバイトをしている方が授業の勉強に費やす時間数が少ないことが解釈できる結果となった。深夜時間帯のアルバイトは本来の睡眠時間を削ることを意味しており、削った分の睡眠や集中力欠如が昼に移行する形で授業時

表 3-4-3 深夜時間帯のアルバイト有無における生活の過ごし方と時間の使い方満足度

	深夜時間帯にアルバイトしている			
	はい		いいえ	
	平均	SD	平均	SD
授業外の勉強時間数	5.58	10.13	5.28	7.34
友人・クラブサークル時間数	21.61	16.86	19.04	14.33
インターネット・マンガ・ゲーム時間数	8.45	8.77	8.81	10.00
授業の勉強	13.39	8.82	15.42	9.24
時間の使い方の満足度	5.38	2.23	5.37	1.94

表 3-4-4 複数アルバイト掛け持ち条件における生活の過ごし方と時間の使い方満足度

	複数のアルバイトを掛け持ちしている			
	はい		いいえ	
	平均	SD	平均	SD
授業外の勉強時間数	6.33	11.28	5.16	7.19
友人・クラブサークル時間数	22.36	16.83	19.23	14.56
インターネット・マンガ・ゲーム時間数	6.19	7.51	9.40	10.06
授業の勉強	13.71	9.42	15.23	9.04
時間の使い方の満足度	5.94	2.01	5.27	1.99

間そのもの、もしくは授業準備に費やす時間に影響を及ぼしている可能性が考えられる。

表 3-4-4 は、複数のアルバイトの掛け持ち有無における、生活の過ごし方と時間の使い方の満足度を比較したものである。アルバイトの掛け持ちによって生活の過ごし方や時間の使い方満足度に差が見られるかについて、t 検定をおこなったところ、インターネット・マンガ・ゲーム時間数 ($t(588) = -3.13, p < .01$) と時間の使い方の満足度 ($t(588) = 3.18, p < .01$) において有意差が見られた。複数のアルバイトの掛け持ちをする学生はインターネット・マンガ・ゲームに費やす時間数が少なく、時間の使い方の満足度は高いことが解釈できる結果となった。複数のアルバイトを実施することで、娯楽に費やす時間が相殺されていると考えるべきであり、結果、報酬面や他の何らかの精神的充足面が関与して満足度が高くなったと予想される。また、これらの結果は、先行研究の並河 (2002) の娯楽時間減少、加来・八尋 (2003) のアルバイト意義を収入と社会勉強に求めている結果と類似していると考えられる。

表 3-4-5 は、授業とアルバイト時間重複有無における、生活の過ごし方と時間の使い方の満足度を比較したものである。授業とアルバイトの重複によって生活の過ごし方や時間の使い方満足度に差が見られるかについて、t 検定をおこなったところ、授業外の勉強時間において

表3-4-5 授業とアルバイト時間の重複条件における生活の過ごし方と時間の使い方の満足度

	授業とアルバイトの時間が重なって困っている			
	はい		いいえ	
	平均	SD	平均	SD
授業外の勉強時間数	7.46	12.05	5.15	7.56
友人・クラブサークル時間数	19.97	14.91	19.64	14.96
インターネット・マンガ・ゲーム時間数	10.49	9.67	8.62	9.75
授業の勉強	13.64	9.60	15.13	9.10
時間の使い方の満足度	5.50	2.37	5.38	1.97

表3-4-6 時間の使い方の満足度3群とアルバイトの実態

		低		中		高	
		N	%	N	%	N	%
現在アルバイトをしている	はい	104	49.5	412	54.2	70	64.8
	いいえ	106	50.5	348	45.8	38	35.2
深夜時間帯にアルバイトをしている	はい	32	30.2	89	21.4	22	31.9
	いいえ	74	69.8	326	78.6	47	68.1
複数のアルバイトを掛け持ちしている	はい	16	15.2	74	17.8	18	25.7
	いいえ	89	84.8	341	82.2	52	74.3
授業とアルバイトの時間が重なって困っている	はい	13	12.5	34	8.3	11	15.7
	いいえ	91	87.5	378	91.7	59	84.3

注：％は低・中・高群それぞれにおける、はい・いいえの割合を示す。

有意差が見られた ($t(581) = 2.03$ $p < .05$)。授業時間とアルバイト時間が重複している方が授業外の勉強に費やす時間数が多いことが解釈できる結果となった。

表3-4-6は既出の時間の使い方の満足度3群（低・中・高）とアルバイトの実態の関連をまとめたものである。顕著な結果として解釈できるのは、満足度高群における、アルバイト有無の項目である。中群、低群はほぼ同じ割合であるのに対し、満足度の高い108名の内訳は、アルバイトをしている者が64.8%、していない者が35.2%であった。アルバイトをすることで、学生は充実感を感じやすいのかもしれない。

3.4.2 アルバイトの目的との関連について

次の表3-4-7においては、アルバイトをする理由に関する回答分布を示す。「やや当てはまる」「非常に当てはまる」の回答を含めると、生活上の必要性があってアルバイトをすることが主な目的となっていることがわかった。併せて働くことを経験するため、遊ぶための金、

表 3-4-7 アルバイトをする理由に関する回答分布

	全然当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらでもない	やや当てはまる	非常に当てはまる
生活上の必要性があって	90 (8.1)	76 (6.8)	65 (5.8)	174 (15.6)	202 (18.2)
働くことを経験するために	51 (4.6)	33 (3.0)	69 (6.2)	265 (23.8)	192 (17.3)
遊ぶためのお金が目的で	50 (4.5)	57 (5.1)	67 (6.0)	263 (23.7)	174 (15.6)
自分を高めるための活動に必要なお金を貯める目的で	62 (5.6)	59 (5.3)	127 (11.4)	206 (18.5)	154 (13.8)

注：括弧内はアルバイトをしていない約44%の学生を含めた、全体学生数に占める割合。

表 3-4-8 時間の使い方の満足度 3 群におけるアルバイト目的の重要度

	時間の使い方満足度 3 群					
	低群		中群		高群	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
生活上の必要性があって	3.68	1.35	3.49	1.43	3.54	1.59
働くことを経験するために	3.68	1.29	3.90	1.09	3.70	1.42
遊ぶためのお金が目的で	3.88	1.19	3.72	1.18	3.69	1.34
自分を高めるための活動に必要なお金を貯める目的で	3.35	1.35	3.59	1.20	3.46	1.39

自分を高めるための活動資金としてもそれぞれ重要度が高かった。不景気によって、親の金銭的支援が乏しくなっていると報告される、昨今の大学生の現実をあらわしている結果だと考えられる。

表 3-4-8 は時間の使い方の満足度 3 群における、アルバイト目的の重要度について比較したものである。満足度低群における、生活上の必要性の重要度は高くなっており、重要度は高いが充実した生活を送れていない実情があるとも考えられる。また、遊ぶための金を稼ぐことが目的であっても、満足感が得られにくい何らかの理由があると考えられる。

[村井 剛]

4. 全体的考察

本研究の目的は、大学生生活の過ごし方の学生タイプを検討し、日頃の時間の使い方の満足度、進路希望の持ち方や進路希望の内容、アルバイトの経験によって、大学生生活の活動時間数に差があるかどうかを検討することであった。

大学生生活の過ごし方のタイプには、活動全般低下群、主体的勉強群、授業出席勉強群、対人活動中心群、授業回避群、ヴァーチャル活動群の 6 つがあることがわかった。都筑・早川・村

井・早川・金子（2011）と比較して、活動全般低下群、主体的勉強群、対人活動中心群、ヴァーチャル活動群はほぼ同じようなタイプであったが、授業出席勉強群と授業回避群は新しく現れたタイプであった。本研究では、都筑・早川・村井・早川・金子（2011）で抽出された「授業外での自主的勉強」因子に加えて、「大学での授業・勉強」因子が抽出されたことにより、授業出席勉強群と授業回避群が見出された。その原因の1つは、本研究が実施された調査時期によるものと考えられる。すなわち、前期の授業の末期に当たる7月に調査がおこなわれたために、普段は授業にあまり出席しない学生も試験前ということで授業に出てきて、調査を受けた可能性が高いということである。

6つのタイプの特徴は、以下の通りである。活動全般低下群は、「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」「大学の授業・勉強」の時間が、最も少なく、授業にもあまり出席せず、対人的な交際やインターネットなどの活動にも消極的であり、大学生活における活動が全般的に不活発な学生であると考えられる。

主体的勉強群は、「授業外の自主的勉強」と「大学の授業・勉強」の両方に多くの時間を割き、授業のみならず、授業外の勉強にも積極的に取り組んでいる学生であると考えられる。大学生活での目標としては、教養やものの見方を身につけることを重要であるととらえる傾向があり、自分で立てた目標を実行していると自己評価していた。この群の学生は、大学で将来の仕事に活かせる能力を身につけることの重要性を相対的に低くとらえており、時間をエンジョイしたり人間関係を築いたりすることが実行できていないと意識する傾向があった。

授業出席勉強群は、大学の授業には熱心に参加するが、「授業外の自主的勉強」の時間は最も少なく、自発的にはあまり学習に取り組まない学生であると考えられる。主体的勉強群とは対照的に、大学生活における目標を実行できているという自己評価が低かった。同じように勉強している学生であっても、自発的に勉強するか、とりあえず授業には出席するかという違いは、大学生活における目標追求に大きな差異をもたらすことが明らかである。

対人活動中心群は、「対人交際」の時間が最も多く、大学の授業に出席しつつ、サークルや友人との交際を活発に繰り返している学生であると考えられる。大学での目標については、教養やものの見方を身につけると同時に、時間をエンジョイしたり人間関係を築いたりすることを重要であるととらえる傾向があり、そうした目標に関しては、実行できていると自己評価していた。

授業回避群は、「大学の授業・勉強」の時間が、活動全般低下群に次いで2番目に少なく、大学生活における活動に対して消極的であり、授業を回避している学生であると考えられる。この群の学生は、専門分野の知識・理解を深めることの重要性を低く見積もっていた。

ヴァーチャル活動群は、「インターネット・マンガ・ゲーム」の時間が最も多く、インターネット等のヴァーチャルな活動を中心に過ごしている学生であると考えられる。

以上のことから、大学生にとって、勉強は重要な活動の1つであるが、ただ授業に出席しているだけでは十分ではないといえるだろう。西垣(2008)の調査でも明らかになったように、いかに主体的に勉強するかということが自らの目標を積極的に追求していくことに繋がっていると考えられる。また、大学生活の中では、部活動やサークルなどを通じた対人関係的な活動の占める割合は大きく、人間関係を築くことを大切に思っている学生は多い(全国私立大学連盟学生委員会, 2011; 國眼・松下・苗田, 2005)。対人活動中心群は、そうした人間関係を大事にしながら学生生活を送っている学生であり、彼らは大学生活を楽しみながら送っていることがわかった。それと対照的だったのは、大学生活における活動が消極的だった活動全般低下群だった。

次に、時間の使い方の満足度の高低によって、大学生活における時間の過ごし方や目標がいかに異なるかを見たところ、次のようなことがわかった。時間の使い方の満足度低群は、在学中の目標に高群よりも意識を高く持っているが、時間の使い方の満足度高群よりも、その目標を実行に移せていない傾向にあった。時間の使い方の満足度が高いほど、大学在学中の目標についての重要度の意識よりも、その目標の実行度が高い。さらに時間の使い方の満足度の高い学生は、自己効力感の得点が高く、将来への希望も高く持ち、計画性もあり、時間管理もできているということが明らかになった。さらに、時間の使い方の満足度が高い学生は、授業外の勉強時間数も多く、友人・クラブサークルにも時間を多くとっていることが明らかになった。逆に、満足度の低い人は、インターネット・マンガ・ゲームにかける時間数が多かった。授業の勉強時間数に関しては、低群・中群・高群の間で差が見られなかった。明治安田生活福祉研究所(2010)は、大学生活に満足している人は、友人との時間、部・サークル・同好会の活動、恋人との時間に楽しみを感じ、満足していない人は、インターネットによる情報収集、一人の時間、テレビ・DVD鑑賞、ゲームに楽しみを多く感じていることを明らかにした。この結果は、時間の使い方に満足している学生に見られた意識と同じ傾向であった。これらのことは、大学生活において人間関係の構築に関わる活動が重要であることを示すものである。

大学生にとって、進路の選択は卒業後の長い人生のあり方を左右するような課題でもある。得られた結果からは、進路希望を1つに絞っている学生の方が将来への希望が強いことが明らかになった。また、民間企業、公務員、専門職という進路希望の違いによって、大学生活において勉強に費やす時間の長さが異なることもわかった。朴澤(2008)が述べているように、「卒業後の目的の明確さ」は学生生活のありようにとって重要な役割を果たすものである。

大学生にとって、もう1つ重要な活動であるアルバイトに関しては、アルバイトをしている学生は時間の使い方の満足度が高く、友人・クラブサークルの活動にも多くの時間を割いていることがわかった。深夜時間帯のアルバイトをすることで勉強時間は少なくなる傾向が見られたが、複数のアルバイトを掛け持ちしている学生は時間の使い方に満足しており、授業とアルバイトが重複している学生は授業外の勉強が多くなることも明らかになった。このような傾向は、アルバイト経験が心理的に肯定的な影響を及ぼすことを見出した田村・木村・三井・松瀬(2011)の結果と一致していた。関口(2010)が述べているように、アルバイト経験は一定の範囲内の時間数であれば、キャリア形成に効果的であり、学生はアルバイトという活動を通して多くのことを学んでいるといえるだろう。

以上のように、それぞれが独自の大学生生活を過ごしている6つのタイプの学生がいることが明らかになった。授業という決められた枠組みの中で勉強するだけでなく、授業外にもいかに自主的に勉強するかという点が充実した大学生生活を送る上での重要な鍵を握っているといえるだろう。同時に、自らの進路を明確に展望することやアルバイトを通じてさまざまな経験を積み重ねていくことの重要性も明らかになった。それぞれのタイプの学生の心理的成長や葛藤について検討していくことが、今後の課題であるといえるだろう。

[都筑 学]

付記 本研究における調査は、2011年6月14日開催の保健体育研究所倫理委員会での承認を受けて実施されたものである。

文 献

- 1) Benesse 教育研究開発センター (2009) 放課後の生活時間調査報告書—小・中・高校生を対象に— 研究所報, Vol. 55.
- 2) 中央大学大学評価委員会 (2011) 2011年度中央大学学生アンケート調査報告書.
- 3) 長谷川祐介 (2011) 大学生活に対する志向性に及ぼす中学高校部活動の影響—教科外活動の長期的効果に関する分析可能性— 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 33 (1), 97-108.
- 4) 朴澤泰男 (2008) 一橋大学における学生の時間使用:「全国大学生調査」を用いた研究ノート 大学教育研究開発センター年報2008年度, 73-86.
- 5) 伊熊克己 (2011) 大学生のライフスタイルと健康に関する研究—2部学生の生活状況に着目して— 経営論集 (北海学園大学), 9 (1), 1-14.
- 6) 加来卯子・八尋俊子 (2003) 女子短大生の起床時の生活行動の実態 西南女学院短期大学研究紀要, 49, 21-27.
- 7) 國眼真理子・松下美知子・苗田敏美 (2005) 文系学部生の大学生生活満足度・充実度と職業イメージとの関連:キャリア支援のための予備的検討. 金沢大学大学教育開放センター紀要, 25, 69

-84.

- 8) 明治安田生活福祉研究所 (2010) 「大学生に関する意識調査」の結果の概要.
- 9) 三好昭子 (2003) 主観的な感覚としての人格特性的自己効力感尺度 (SMSGSE) の開発 発達心理学研究, 14, 172-179.
- 10) 溝上慎一 (2009) 「大学生生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討—正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す— 京都大学高等教育研究, 15, 107-118.
- 11) 並河裕 (2002) 本学学生の基本的な生活行動の実態について: 生活時間調査から. 琉球大学教育学部紀要, 61, 33-41.
- 12) 西垣順子 (2008) 初年次学生の「質」に関する調査報告—学生による質評価と成績評価, 自主学习との関連—. 大学教育 (大阪市立大学), 6 (1), 1-8.
- 13) 大前敦巳 (2004) キャンパスの人間形成機能からみた現代の学生生活—上越教育大学と関西私立大学・短大の調査結果から— 上越教育大学研究紀要, 24 (1), 45-59.
- 14) 関口倫紀 (2010) 大学生のアルバイト経験とキャリア形成. 日本労働研究雑誌, 602, 67-85.
- 15) 杉山成 (2007) アルバイト経験はキャリア意識の形成にどのような影響を与えるのか 小樽商科大学人文研究, 113, 87-98.
- 16) 杉山成 (2009) アルバイト経験はキャリア意識の形成にどのような影響を与えるのか (2): アルバイトの位置づけに関する検討 小樽商科大学人文研究, 117, 1-14.
- 17) 田村隆宏・木村信貴・三井理愛・松瀬誉幸 (2011) 大学生の心理的 well-being に及ぼすアルバイト活動の影響 鳴門教育大学研究紀要, 26, 43-52.
- 18) 東京大学大学経営・政策研究センター (2007) 2007年全国大学生調査 第一次~第三次調査基礎集計表.
- 19) 東京大学大学経営・政策研究センター (2008) 全国大学生調査 第一次報告書.
- 20) 都筑学 (1999) 大学生の時間的展望—構造モデルの心理学的検討— 中央大学出版部.
- 21) 都筑学・早川宏子・村井剛・早川みどり・岡田有司 (2010) 大学生の生活と意識に関する調査研究—生活管理能力や生活の規則性と健康意識, 自己意識, 時間的展望との関連 中央大学保健体育研究所紀要, 28, 1-19.
- 22) 都筑学・早川宏子・村井剛・早川みどり・金子泰之 (2011) 大学生生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴 中央大学保健体育研究所紀要, 29, 7-33.
- 23) 渡辺裕子 (2006) 施設・設備の利用からみた駿河台大学学生のキャンパス生活 駿河台大学論叢, 32, 67-89.
- 24) 吉岡朋子・風間健 (1996) 女子学生のアルバイトが生活時間に及ぼす影響 武庫川女子大学紀要 (人文・社会科学), 44, 143-146.
- 25) 全国私立大学連盟学生委員会 (2011) 私立大学学生生活白書2011.